

松尾鉱山跡地の今と今後（環境保全）

松尾鉱山は 55 年にわたる操業期間に、約 2,900 万トンの硫黄と硫化鉄鉱石を抽出し、1,000 万トンの硫酸と 210 万トンの精製硫黄を生産しました。こうした 55 年間の歴史からは従業員の日々の福祉に惜しみなく投資した先見性ある企業経営の物語がうかがい知れますが、その一方ではるかに暗い現実も存在します。河川や森林の深刻な汚染が鉱山の廃止までほとんど放置されていたのです。

鉱山の露出した斜面への降雨と坑道からの地下水が山中の大量の硫化鉄鉱石と混ざると、酸性鉱山排水、すなわち AMD として知られるヒ素を含んだ強酸性の排水が作り出されます。より厳しい環境基準が制定される前の 1800 年代後半から 1900 年代初頭にかけて開発された鉱山で一般的だったように、松尾鉱山では重力排水によってこうした水を地下坑道網から排水していました。この極めて有害な排水が土壌や周辺の水路に流出することによって引き起こされる森林や水質の汚染は、今日に至るまで継続した管理を必要とする問題となっています。1970 年代までに、東北地方で最も長い河川である北上川は汚染が非常に深刻であったため「死んだ川」と呼ばれ、その水質悪化は遠く盛岡まで及んでいました。

1976 年に廃鉱山で中和処理施設および貯泥ダムの建設が開始され、1981 年に完了しました。以来、バクテリア酸化や炭酸カルシウム処理などの対策を継続してきたことで河川の汚染は改善していますが、その一方で 2012 年の当局の発表によると、もし中和作業が中断された場合、農業、工業、および家庭用水として使用されている北上川流域へのその後の経済的損害は年間 500 億円近くに達すると見込まれています。AMD は八幡平においてはまだ 24 時間 365 日続いている問題なのです。

中和処理施設では現在、毎分 18 立方メートルの酸性排水を中和していますが、これには年間 5 億円のコストがかかっています。これは鉱山の稼働期間中に得られた利益をはるかに上回る、財政的に厳しい現実です。県当局は状況を取り繕うことはせず、松尾の教訓は資源抽出と経済政策に関する現代の対話にとって重要な意味があるとの考えを持っています。中和施設は 10～30 人のグループ（9 歳以上）で見学することができます。見学は平日のみで、1 週間前までに予約が必要です。

2005 年以降、斜面の緑化活動に参加する市民の数は増加しています。この活動により、

露天掘りで丸裸になった土地やボタ山として使用された土地に草地を定着させることに成功しました。森林再生とそれに関連する環境調査は着々と進んでおり、2004年から2017年にかけて、カシ、サクラ、クリ、カラマツなど、合計 66,680 本の苗木が植えられました。